

以下は、アメリカの団体The Feminist Majority Foundationの中のNational Center for Women & Policing が制作した警察官教育用教材「Unfounded Cases and False Allegations」の抄訳です。原文は、  
<http://www.vaw.umn.edu/documents/acquaintsa/ParticipantManual/Allegations/AllegationsMOD.pdf>に掲載されています。

知り合いによる強姦の捜査に成功するために：法執行機関のための国家トレーニング・マニュアル  
開発：女性に対する暴力局、司法局プログラムの協力により女性と警察に関する国民センターが開発した。

## **根拠なき事件と虚偽告訴**

**キンバリー・A・ロンズウェイ**

**女性と警察に関する国民センター、リサーチ・ディレクター著**

## 虚偽告訴、それは居間に象がいるというようなもの<sup>1</sup>

性暴力の捜査に関する伝統的な警察官の研修では、虚偽告訴は「居間に象がいる」というようなものであるという。つぎの場面を想像してみるとよい。

教官が性暴力事件をどのように捜査すればうまくいくかを教える間、参加者は注意深く聴き、被害者の傷つきやすさとか、容疑者のタイプとか、証拠の収集についてノットをとる。しかし、その部屋にいる誰もが、研修教材は警察署まで上がってくる「本当の」事件以外には関係ないものだと思っている。研修では、参加者や教官が事件を、「本当の」事件とそうでない事件（明確でない、あいまいなまたは単なる作り物）に分ける区別方法について、何ら疑問を投げかけるものではない。

本研修は、本書は虚偽告訴の問題について意味ある、かつ、徹底的な調査をするために作られたものである。われわれは、警察官の研修不足や経験不足以上に、性暴力被害者にとって大きな障害を作ってきた疑問について答えを与えことを試みる。それらは次を含む。

- ・ 「虚偽告訴」とは何を意味するのか
- ・ 性暴力の通報のうちどのくらいの数が虚偽と推定されているのか
- ・ 根拠がない告訴と虚偽告訴が、用語のせいでのどのように混同されているか
- ・ なぜ「本当の強姦」<sup>2</sup>のステレオタイプに合致しない事件は根拠がない事件とされるか
- ・ なぜ「困難な事件」は根拠がない事件とされるか
- ・ 性暴力事件を不適切に根拠がない事件とすることでどのような結果が生じるか
- ・ 刑法の「豆隠し手品」
- ・ 警察はどうやって根拠がない事件を「創作」するのか
- ・ 警察と被害者の両方にとって有害な「不信感の悪循環」に対し、警察官はどのように対処したらよいのか
- ・ 根拠がない事件とすること及び事件を行政上終了させるための適切な手続きとはどのようなものか
- ・ 虚偽告訴という対処困難な現実にとどのように対処したらよいのか

性暴力に関する通報のほとんどは虚偽だと考える十分に研修を積んだ警察官より、被害者を信じて事件を真剣に取り扱う研修不足の警察官のほうが、結局は好ましいということになる。この授業の目的は、これらの問題を考え、警察官に具体的な研修を行うとともに、この研修はすべての性暴力事件に関係あるという考えをもってもらうことにある。

---

<sup>1</sup> 訳者注： 現実にはあり得ないこと

<sup>2</sup> 訳者注： スーザン・エルトリッチが著書「リアル・レイプ」（1987年）の中で、見知らぬ男性に夜道でいきなり襲われるといった種類の強姦をこう呼んだ。

## 「根拠なき事件」とは何を意味するのか？

他にもこの点に注目した人がいるように、根拠のない告訴の意義は不正確であり、そのため、根拠なき告訴がどのくらいあるのかという問題を議論したり、その数を推定しようとする場合に混乱が生じる。例えば、何が根拠のない告訴で、何が根拠がある告訴かを定義する試みの多くは、告訴者の動機を重視してきた。いくつかの定義は、根拠のない告訴には故意に騙すという動機の存在が必要であるとするが、そういう動機が存在しないに実体がない事件というのは明らかに存在する。性暴力においては、精神病や単なる間違い（例えば、実際は性暴力を受けていないのに受けたと信じたりすること）によって、騙したりすることなく虚偽の告訴がなされることがある。

この分野でもうひとつ非常に重要な問題は、告訴が「虚偽告訴」とされるためには、告訴がどのくらい「虚偽」でなければならないかというものである。アキネン（1993年）はつぎのように言う。

告訴のすべてが虚偽でなければ虚偽告訴とは言えないのか？ それはどのくらい虚偽でなければならないのか？

この問題は、被害者面接に関する授業ですでに議論したが、ここでも注意が必要である。というのも、多くの被害者の供述は、一貫性を欠いたり、ウソの情報が含まれていたりするが、それを虚偽告訴と混同してはならないからである。

- ・ 例えば、被害者はトラウマ、ショック、性行為の詳細を語ることの不快感、疑われるあるいは責められることへの恐怖、または事件がもっとわたしたちみんながよく知っている「本当の強姦」のステレオタイプらしく見えるようにするために、一貫しない、あるいはウソの情報を提供するかもしれない。

一貫性のない供述やウソの供述にどのように対処したらよいか

一貫性のなさやウソは、警察官が適切に取り扱わなければ、不幸にも被害者の信頼性を破壊することになる。被害者の面接の授業で議論したように、被害者の供述に一貫性がなかったり、ウソがあると疑われる場合に捜査官がとるべき方法はいくつもある。

- ・ 第一に、これらの一貫性のなさやウソが理解できるものであることを捜査官が気付くことがもっとも重要であり、これを「虚偽」告訴と混同すべきでない。
- ・ つぎに捜査官は、被害者の供述中の一貫性のない部分やウソについて、優しく、かつ、批判的でない方法で供述について探ることで、その問題に対処しなければならない。どのようにこれを行うかの具体的ガイドは、被害者面接の授業で取り扱っている。

もし、一貫性のなさが、被害者が受けた暴力を「本当の強姦」らしく見せようとした結果である場合、警察官は、被害者の心の奥にある、疑われたり、責められたりすることへの恐怖に対処すべきである。具体的なガイドは被害者面接の授業で取り扱うが、捜査官が安全で、批判的でない状況を作って、誉められないような行為や違法な行為についてさえも信実を言えるようにすることが非常に重要である。

虚偽告訴はどのくらい虚偽である必要があるのか？

被害者にとって、受けた暴力について一貫性かなかったり、ウソの供述をする理由が多くあることを考えると、被害者が一貫性のないあるいはウソの供述をすることは頻繁に予期されるし、あるいは不可避とさえ言える。しかし、多くの捜査官やその他の人は、そのことをもって、告訴全体が虚偽であるという誤った結論に到達する。例えば、アイケンは、その著作（1993年）の中で、虚偽告訴を「犯罪のいずれかの重要な側面について、故意に騙そうとする主張である」と定義する。この定義に基づき、著者は虚偽の強姦告訴の事案としてつぎの事件を提供する。

トニは自宅で就寝中、ベッドの横に誰かがいる気配を感じて目を覚ました。そこには、マスクをした男がナイフを持って立っていた。彼は彼女をナイフで脅して、女性性器を使ったセックスを強要した。彼は彼女に口淫も強要した。彼が立ち去った後、彼女は急いで警察に電話をかけた。彼女は、口淫をしたことは恥ずかしく、良くないことをしたと感じたため、供述の中で口淫をしたことを否定した。

パトリシアは薬物中毒者であった。彼女は薬物を得るためならほとんどどんなことでもした。彼女は、ある売人からクラックを買う手はずを整えた。彼女は約束の時間と場所で彼に会った。その取引の途中で、売買条件で意見が合わなくなった。売人はパトリシアに暴力を振るい、空家の後ろに引きずっていき、セックスを強要した。パトリシアはそのことを警察に告げたが、薬の売買についてはまったく触れなかった。

キャサリンは一人暮で、近所の人に性的暴力を振るわれた。彼は彼女に女性性器を使ったセックスと口淫を強要した。キャサリンはいつも彼に恐怖を感じていた。彼は、警察に通報したら殺すと言ってキャサリンを脅した。彼女は性病にかかったのではないかと思って不安になってもいた。彼女は、無料で診療を受けるため、事件を警察に知らせた。彼女は、加害者はマスクをかぶった知らない男だと言い、口淫させられたことも否定した。

これらの事件を「虚偽告訴」としてしまうことは、不正確だけでなく、問題が多い。最初の事案で、被害者は羞恥心のため、ある性行為の詳細を省いた。2番目の事案で、他者の認知する信頼性を増すために、被害者は自分の薬物使用を省き、最後の事案で、被害者は命の危険を感じて攻撃者を特定しなかった。これらの事案は真の虚偽告訴ではない。被害者が攻撃の一部を省いたり、歪曲する事件はあるが、それらの省略や歪曲は、攻撃が起きたこと自体を否定するものではない。

チューラ・ビスタ警察署のジョン・マカヴィニア刑事は、この種の事件の特徴をより上手に説明している。

最近起こった事件のいくつかは、被害者がパーティーから自宅に帰る途中で、知らない男に藪の中に引きずりこまれて強姦されたと言うものだった。被害者らは、本当のウソつきがするように落ち葉や草を自分の体にこすりつけておくことを忘れていたので、捜査官は何かが変わったと感じた。捜査が完了したとき、被害者が実際に強姦されていたことが判明した。しかし、それはパーティーで彼女たちの知っているしかも信頼していた誰かによってであった。悪意ではなく、恥ずかしいという気持ちから出たこれらの一貫性のない供述が事件を台無しにすることがある。これらの事件は、性犯罪の被害者がウソつきだということをわれわれに教訓するのだろうか。もちろん、違う。しかしこれらは、強盗や空き巣や窃盗の被害者と同様に犯罪の被害者であることに加えて、犯罪が性的であることによって被害者は汚名を着せられ、事件によっては、犯罪の被害を受ける前の自分の行動について懸念するということを、われわれに教える。そして、この汚名が、彼女たちに話を変えさせるのだ。

## 結 論

虚偽告訴を構成するものが何であるかについては多くの解釈があることは明かであるが、もっとも適切な定義は、「性暴力の告訴で性暴力の要件が欠けている」というものである。虚偽告訴は故意の詐術、幻想または過ちにより起きることがある。例えば、望まない性行為が行われても、単純に性暴力の法的定義に当てはまらないこともある。

- ・ しかしながら、「虚偽告訴」という言葉は、攻撃があったが、被害者が供述の中で一貫性のないあるいはウソの情報を提供した事件について使われるべきではない。
- ・ 被害者が情報の一部しか提供しない、あるいは歪曲した情報を提供する事件は確かに捜査が難しい。しかし、攻撃がなかったということを証明する証拠がない限り、虚偽とされるべきではない。

むしろ、「すべての告訴は、真実ではないと考えるべき具体的証拠が内限り、必要的に、額面どおりのものとしてえ取り扱われなければならない。」

## どのくらいの件数の性暴力の通報が虚偽と推定されているか？

虚偽通報の割合の推定は、すべての調査で大きく食い違っている。告訴を虚偽と判断してこれを記録する方法がまちまちなうえ、上述のとおり定義もまちまちなのであるから、無理はない。例えば、カニンによる過去数年間の推定の検討（1994年）によれば、低いものは0.25%

や1%から、高いものは80%から90%までである。カニン自身が、調査した中西部の警察署の一つについて41%、二つの大学について50%と報告している。

- ・ デンバー都市部警察署が行った非公式の調査によると、同じ警察署の刑事たちが5%から65%という数字を示した。
- ・ 警察官、被害者のためのアドボケート、その他の刑事司法に関わる人が参加した会議で行われた非公式の調査によると、推定割合は0%から98%であった。

明らかに、これは虚偽通報の割合について得た数値としては開きが非常に大きい。この状況は、差異が認知の差と用語だけによるものではなく、どのような情報が収集され、どのようにして通報が「虚偽」と判断されるのかにもよることを示唆するものである。この混乱の主たる源は、「虚偽告訴」に対する「根拠がない」という用語である。

### **なぜ用語によって、根拠がない事件と虚偽告訴が混同されるのか？**

虚偽告訴とは、性暴力の捜査において「居間に像がいる」というようなものであるから、研修において克服すべきもっとも困難な問題である。この問題は、虚偽告訴につけられた呼称が、十分な証拠がないか、その他の形の事件終了につけられた呼称と混同されていることによってさらに複雑化している。

この点に関する連邦通報規定は明確である。捜査後、虚偽または基礎的事実がないと判断した場合のみ、事件は根拠がないとすることができる。加害者の逮捕ができないとか、被害者が捜査に協力しないため終了した事件は含まない。

この問題は、警察署が虚偽あるいは基礎事実の不存在以外の理由で、根拠がないとして事件を終了することがよくあるため、さらに複雑化する。したがって、実務では、「根拠のない強姦には多くの意味がある。虚偽告訴もその一つだが、そのうちでは最も少ないものであることもある。不適切に根拠がないとされるために使用される他の要素はつぎを含む。

- ・ 警察は被害者を見つけることができない。
- ・ 被害者が検察に協力しない。
- ・ 被害者が強姦の説明内容を何度も変える。
- ・ 被害者が告訴を取り消す。
- ・ 加害者が特定できない。

これらのいずれの状況においても、性暴力が起きなかったと推定されているわけではない。にもかかわらず、これらの事件を強制的に終了させる必要から、不適切に根拠がないものとしている。

そして、多くの警察署で、活性化しないという言葉ではなく、根拠がないという言葉を使って事件を終了させているのである。

(訳省略)

### **「本当の強姦」のステレオタイプに当てあまらない事件のうち、どのくらいが根拠のないものとされているのか**

多くの事件が不適切にも根拠がないとされているもうひとつの理由は、捜査上の事実に基礎付けられた疑いのためではなく、事件あるいは被害者の特徴のためである。上述したとおり、事件や被害者が、文化の影響を受けるステレオタイプである「本当の強姦」のそれに当てはまらないとき、性暴力事件は疑いの目で見られるのだ。

- ・ 例えば、被害者と加害者が知り合いの場合、特に従前に性交渉があった場合、被害者の通報が遅れた場合、被害者が物理的抵抗や加害者が行使した暴力や武器について語らなかった場合などにおいて、警察も一般人もいかなる性暴力の主張も疑いの目をもって見る。

ところが、ダイナミクス(力関係)の章で示すとおり、訴えの正当性を疑う理由としてこれらの特徴を挙げるのは完全に間違っている。

- ・ 真実は、性暴力の被害者のほとんどは加害を知っており、ほとんどの被害者の通報が遅れ(またはまったく通報されず)、ほとんどが物理的抵抗をせず、ほとんどの容疑者は物理的暴力を行使したり、武器を使用したりしない。
- ・ したがって、これらの特徴は「虚偽告訴」と混同されてはならないし、性暴力事件を根拠がないとする理由として使用してはならない。

このような事実にもかかわらず、警察がこれらの特徴を根拠がない性暴力事件の理由として使用していることを知っている。例えば、多くの管轄において、警察官が最初の方向またはそれに続く定型的で粗略な捜査において、告訴を根拠がないものと断定しているという証拠がある。これらの決定は捜査上の事実に基づいて行われているわけではなく、現実にはこの種の事件の典型である事件に対して相応しくない疑いを惹起している「本当の強姦」のステレオタイプに基づいているのである。

- ・ したがって、加害者と被害者の間に以前に性交渉があると、被害者にアザが残っていたり、目の周りが黒ずんでいたたり、タバコによる熱傷があったり、乳首が噛まれていたりしても、告訴は根拠がないと断定する警察官すらいる。

警察官が、単に誤って事件について疑いを持ったために、行政的に性暴力事件を終わりにする道具として根拠がないということを利用することは、明らかに不適切である。

### 「難しい」事件に、どのくらい根拠がないということが使われているか

実体があると思われる事件でも、事件が困難だという理由で不適切に根拠がないものとされることがある。被害者が捜査への協力を拒んだり、面接やその他の裁判所の手続きに現れなかったりすると事件は難しくなることがある。被害者が裁判所での信頼性を損なうような特徴、例えば薬物使用、売春、犯罪歴などを有している場合にも、事件は難しくなる。しかし、これらのいずれも、性暴力事件の根拠をなくすものではない。それにもかかわらず、警察署が不適切に「困難な事件」を終結させるための道具として、根拠がないというのを使用する例が多い。

(オークランド警察の例、訳省略)

### 性暴力事件を不適切に根拠がないとすることは、どのような結果を生じるか？

不幸なことに、不適切に性暴力事件を根拠がないとすることが引き起こす結果は、警察、被害者そして市民にとって悲劇的である。

- ・ 警察にとって、根拠がない事件が高い割合で存在することは、市民による監視と手続きを変えるべきだという圧力につながる。例えば、オークランドにおいては、マスコミや市民からの圧力のため、警察署は、被害者からの聞き取りも行われなかった37件を含むほとんど捜査をせずに終了した203件の強姦事件を再捜査することになった。
- ・ 不適切に根拠がないとされた事件の被害者は、被害から回復するために悪影響を及ぼす裏切られたという気持ちと、不信感を生む。さらに、性暴力に関する事件は真剣に取り合ってもらえないという市民の意識は、将来被害者が事件を通報するかどうかに影響することは必至である。

より大きな規模では、性暴力事件を不適切に根拠がないとすることは、司法の失策と市民の安全に対する脅威となる。「ベイ・エリア強姦に反対する女性たち」の執行責任者であるマーシャ・ブラックスティックが結論づけたとおり、オークランド警察が困難な事件を根拠がないとしていた慣習は、捜査責任の回避を意味する。「もし、しっかり捜査すれば、これらの事件を訴追し、有罪にすることができる。被害者が薬物を使用していたからといって被害者でなくなるわけではないし、薬物を使用している女性を強姦したからといって強姦者が社会の脅威でなくなるわけでもない。」

市民に対する他の影響として、警察の統計が実際より低い性暴力の割合と、高い事件の終了割合を示しているために生じる現実についての誤った認識が挙げられる。例えば、多くの警察署や

大学は、犯罪数を低く抑えることを重要視しているが、これが、警察官が刑法以外の法規を使用したり、根拠がないとすることで、性暴力事件を「消し去る」ように圧力を加えることがある。

### 不適切に根拠がないとすることが、どのように根拠がない告訴の神話を強めるか

日常的に性暴力事件を根拠がないとすることで起こる結果のうちもっとも悲劇的なものは、事件が虚偽であると判断される割合が高いという神話を強めることであろう。女性は強姦されたとウソをつくという考えは、被疑者が友人や家族や、社会的サービス機関や、刑事司法機関に助けを求めようとするとき、もっともマイナスに働く根本的な神話である。F B I に対して事件を不適切に根拠がないと報告することにより、社会の多くの人々に「根拠がない事件」と「虚偽告訴」を混同させるだけでなく、これあの不正確な統計が性暴力事件は他の事件より虚偽の割合が高いという感覚を生じさせてしまう。

- ・ 例えば、根拠がない性暴力事件は、1995年には8%だったが、1996年には15%で、その他のすべての事件については2%だった。

しかし、虚偽と思われる事件と根拠がない事件を分けると、状況は一転する。

- ・ この点を説明すると、オレゴン州警察は、1990年に起きた性暴力事件431件を調べたところ、1.6%が虚偽であったと判断した。自動車窃盗の虚偽通報率は2.6%だった。

この問題は、ニューヨーク警察署の元警官ハリー・オレリーによってもっとも雄弁的に語られている。

私が扱いたい最後の神話は虚偽告訴だ。無実の男性に対して虚偽の告訴をし回るような女性が本当にいるだろうか。そんなことが実際に起こっているのだろうか。これらは虚偽通報だろうか。もちろん、そうに違いない。そして、我々は、常に警戒心を持って被害者がウソをついているかもしれないと意識しなければならない。ウソをつく女性も当然いるが、真実の告訴の数に比べれば虚偽通報は無視できるほどしかない。ニューヨーク市において6か月間に通報された2000件の強姦事件のうち、250件が根拠のない通報だった。しかし「根拠がない」というのはウソをついているというのとは違う。それがどういう意味か見てみよう。250件のうち200件は単なる行政的なミスだった。これらの事件は最初から強姦事件と名づけられるべきではなかったのだ。例えば、女性が警察に電話して、「強姦」と叫ぶ。パトカーが駆けつけるが家には誰もいなかった。翌日、警察官が事件をフォローしに行ってみると、その女性が「ボーイフレンドとケンカしちゃって、『強姦』って叫んじゃったの。」と言う。「なぜ『強姦』と叫んだのか。」「だって不適切な行為って叫んでも誰も来ないでしょうけど、強姦って叫べば警察が急いで飛んで来るわ。」この類は虚偽の強姦通報ではなく、警察に対する小さな不都合にすぎない。

ということは、2000件のうち、ウソかもしれない事件が50件あるということだ。その50件のうち20件は、女性が専横的な父親か夫から自分の身を守るためのある種の試みだ。なぜなら、彼女は何らかの家族のルール、例えば門限を破ってしまって、なぜ遅くなったか説明しなければならないからだ。このような場合、特定の人物を訴えることはほとんどない。むしろそう言う場合は、夜、誰か知らない人の車に引きずり込まれて、すごくひどいことをされ、家に帰るのが2時間遅れたと言う。また他に、精神的に問題がある女性、主に寂しいと感じている女性がいて、もし強姦されたと言え、警察官がきてしばらく話していってくれるということを知っているのだ。これらの女性たちは、ウソをついたわけだが、専横的な父親や夫ほどの悪意はない。

このように「根拠のない」通報を分析すると、女性が悪意を持ってウソをついて、行われてもいない強姦を行ったと男性を訴える事案は5件しか残らない。その場合、女性は虚偽告訴の容疑で逮捕される。虚偽告訴は罰せられるべき犯罪である。結局、2000件のうち5件のウソつきがいるということだ。わたしにとって、これはほとんどの被害者が真実を語っていると結論づけるに十分な証拠だ。(96 - 7頁)。

(以下、本文訳省略)

以下の記述は、つぎの文献からの抜粋である。

- C・P・マクダウェル、N・S・ヒブラー共著  
「虚偽告訴」(1987年)(第11章、275頁～299頁)  
R・R・ヘーゼルウッド、A・W・パージェス編  
「強姦捜査の実践的側面、学際的アプローチ」

性暴力に関する虚偽告訴が行われる場合、この行為を動機づける多くの理由が存在する。その中でもっとも顕著なものは、注目してほしいくて切羽詰って性暴力の告訴をする女性である。その他に、合意に基づく性交渉の責任をとることを拒否したり、他者に押し付けたりするためというのがある。理由はどうあれ、虚偽告訴は事件の漠然とした描写から、自傷したり証拠をねつ造したりしてまで詳細に叙述するものまでである。以下は、C・P・マクダウェル、N・S・ヒブラー(1987年)による虚偽告訴の詳細な検討と、真実の主張と虚偽告訴を区別するためにしばしば利用される特徴についての章からの引用である。著者らが警告するように、これらの特徴のいずれも単独で意味があるものではなく、いくつかを組み合わさっている場合でさえ虚偽告訴を示唆しないこともある。むしろ、1つの事件にこれらのサインの多くが現れた場合に、捜査官はその告訴が歪曲されているか、あるいは虚偽である可能性があることの警告とすべきである。

#### 強姦の虚偽告訴のサイン

いかなる刑事告訴でも、それが真実であることを判断する単純な方法が存在しないのは当然である。通報された犯罪が、強姦であれ、住居侵入であれ、その他の犯罪であれ、このことは同様に真実である。真実でないと感じる具体的な理由がない限り、すべての告訴は、必要的に主張どおりに受け取り、取り扱わなければならない。ほとんどの場合、通報が虚偽であったことを被害者に認めさせない限り、犯罪が実際に起きたかどうか決定するのは不可能である。しかし、住居侵入や強盗の告訴と同様に、真実の強姦の告訴より、虚偽の強姦の告訴に頻繁に見られるある種の特徴がある。これらの特徴それ自体は意味のあるものではないが、合わさると、真実と報告が異なる可能性があることを示唆するものである。

#### 被害者と加害者の関係

文献によれば、被害者の知っている人あるいは被害者とそれ以前になんらかの関係があった人が加害者である強姦はそうでない強姦より数が多い。これらの強姦の多くが、友人、知り合い、同僚、仲間、あるいは親類による性暴力である。事実、このような関係があることが被害者の問題を大きくする。なぜなら、彼女は、捜査とその後の司法手続きという試練の間、加害者(及び共通の友人)と顔を合わせ続けなければならないからである。強姦の虚偽告訴においては、加害者が知らない人であったり、「ほとんど知らない人」であったり、名前も知らない「友人の友人」で

ある蓋然性が若干高いといえる。そういう加害者を選ぶ明白な理由は、被害者が特定の人間と対決する可能性を回避するためであったり、さらには誰にも迷惑を掛けないためだったりする。

絶対匿名の強姦者を作り上げることによって、偽の被害者は人間関係に関する責任から逃れることができ、したがって自分が基本的に無実であることを肯定できるのである。さらに、特定不能な誰かによって強姦されたと主張することにより、警察官が事件をうまく解決することを不能にし、矛盾点を突かれることを恐れることなく、責任を加害者や究極的には警察に押し付けることができるのである。

## 暴力と抵抗

強姦の顕著な特徴の1つに、被害者が典型的に恐怖で圧倒されたと報告することがある。そのため、実際の物理的抵抗の程度は弱いことがしばしばで、強姦者が実際に使用する暴力が口頭の脅しにとどまることもある。強姦者が攻撃中に物理的方法や武器を見せなくとも、被害者は命が危険にさらされていると信じて、生き延びるためにもっとも有効と思われる方法であれば何でもするという反応をする。この反応には、比較的少ない抵抗で加害者に降参することが含まれている場合が多い。これに対して、虚偽告訴者は、全能力で戦ったと主張するものが多い。彼女たちは、典型的に、最終的に圧倒されてしまうまで、加害者を殴ったとか、蹴ったとか、引っ掻いたとか言う。2人以上に攻撃されて強姦されたとして、抵抗できなかった理由を強化するものもある。その他の場合、偽の被害者は加害者が例外的に大柄で力が強く、比較的簡単に彼女を圧倒したと主張する。重要な点は、偽の被害者は、抵抗したとか抵抗を不可能にするような環境だったとか、自分の面目を保つための要素を加えることが多いということである。

## 行われた性行為の性質

コモン・ローにおいては、強姦は伝統的に性器挿入がある行為と定義されているが、この犯罪には他の多くの性的行為が含まれていることがある。強姦事件の相当数において、女性は性器挿入ではなく、あるいは性器挿入に加えて、他の行為をさせられる。虚偽告訴の場合、そのような他の性行為が報告されることはより稀である。偽の被害者の性行為の範囲に口淫やアナル・セックスなど他の性行為が含まれない限り、強姦通報がそれら他の性行為の通報が付随している必要があると思っていないのは明らかである。だから、虚偽の強姦告訴は、通常、その構造が狭く、性器の挿入、乳房や性器への接触以外の行為が含まれていることはほとんどない。このような特徴が現れるのは、主張を裏付けるために他の行為は不要だという理由付けをしたり、そのような性行為に不快感を持っていて自分自身を貶めたくないと思ったり、絶対的に必要な限度以上にウソをつきたくないからかもしれない。同様に重要なことは、暴力についての描写が少ないことである。これは、それらの犯罪で実際に何が行われるかについて、虚偽告訴者の知識が乏しいことを示すものである可能性がある。

## 詳細の記憶

強姦された女性は、行われた性行為の性質や順番など、ある程度正確に事件を描写することができる。虚偽告訴をする女性は、その間目を閉じていたとか、気絶したとか、挿入されたことを憶えていないとか、実際の性行為の具体的事実を憶えていないなどと言うことが多い。その一方で、無感情、かつ、精妙に事件を描写できるものもいる。実際の強姦被害者が何が起こったかを無感情に語ることがあることに注意しなければならない。これは、彼女たちが受け入れがたい経験から自分を引き離そうと試みるプロセスである。しかし、実際の強姦事件において、その描写が、（虚偽告訴の場合と）同様に精妙なことはほとんどない。

事件を語ることは、被害者にとって羞恥心を伴い、感情的に不快なものではあるが、基本的には実際に起きたことを繰り返す行為に過ぎない。虚偽告訴をする女性にとって状況はまったく異なる。彼女は、自分が主張する事実を「発明」しなければならないか、あるいは同意ある性交渉を「強姦」に転換しなければならない。そうすることによって、彼女は自分が文化的に異常な状況にいることに気がつく。われわれの文化は、女性が他人（例えば警察官）に、自分と他者との性行為を語ることを良しとしない。強姦の虚偽告訴をする女性は、まさにそのような環境に置かれることになる。自分にされたことを客観的に語るができないため、彼女の語ることは漠然として、回避的であったり、文化的な垣根を乗り越えるために描写しすぎたりするのである。

## 身体への傷害

われわれの経験では、実際の強姦事件の3分の1において、被害者に対しなんらかの身体的暴力が振るわれている。ほとんどの場合は、被害者を殴ったり、叩いたり、首をしめたり、地面に押し倒したり、無理やり服を剥ぎ取ったりするものである。激しい暴力が振るわれるのは、そのうちのほんの僅かな事例である。

（強姦そのもの以外に）身体的に暴行された被害者は、骨折、歯が折れる、性器や乳房の切除、体內的傷害などの深刻な怪我をすることもある。実際、強姦中に殺害される被害者もいる。虚偽告訴者が深刻な身体的傷害を負っていることは少ない。しかし、人格障害の程度が進むにつれて、自傷の程度もひどくなる。

事例：27歳の主婦が、自宅近くの木々に囲まれた場所で呆然として地面に横たわっていると発見された。下着の中に脅迫状が挟まっているのが見つかった。彼女は襲われたが強姦はされなかったと言った。彼女にはいくつもの引っ掻き傷とアザがあったが、ひどいケガはなかった。1週間後、彼女は自宅の地下で暴行されたと主張し、ひどい切り傷を負っていた。血で「警告したはずだ」というメッセージが書かれていた。

この女性は、身体の一部を自分で切りとって強姦の虚偽告訴をしたという理由で、以前に陸軍を除隊になっていた。彼女には、疑わしいケガや病気で入院を繰り返した長期に及ぶ経歴があっ

た。彼女は深刻な結婚生活及び金銭的なトラブルを抱えていて、通っていた夜間大学でも苦勞していた。強姦の告訴は、彼女が「真正な」被害者として、それがなければ彼女の人生に欠けていた心配と同情と助けを得る機会を彼女に与えたのである。

自傷は、実際の性暴力で被る傷害とは典型的に異なる。虚偽の強姦告訴における傷害には、捜査官が関心を持つべき2つの特徴がある。1つ目は、被害者の傷そのものに関するものである。2つ目は、自分の傷に対する被害者の反応である。

自傷した偽の被害者は、広い範囲に傷を負っている傾向がある。にもかかわらず、目、乳首、唇、性器など非常に傷つきやすい臓器や皮膚が傷ついていることはほとんどない。通常、自傷は、つめで引っ掻いたり、剃刀やその他の鋭い道具で切って作られる。したがって、傷は自分の手の届く範囲にあり、めずらしい角度のものとなる。傷がその人の腕や手の動く範囲と一致することがしばしばである。側面、前面、背中の方の切り傷や引っかき傷は、そのことが特にわかりやすい。傷が小さな引っかき傷から命にかかわるような切り傷や刺し傷までであっても、外見は実際よりよほどひどく見える。その訳は、それらが被害者を不具にしたり、殺したりする目的ではなく、その人の主張を裏付けるために傷つけられたものだからである。傷が、かなりの解剖学的知識を反映したものであることもよくある。(例えば、基幹動脈や腱は避け、永遠に残るような傷は非常に少ない。)

## 証 拠

警察官は主張を裏づける証拠をもっとも重要なものとして取り扱うが、これは正しいことだといえる。なぜなら、それが事件を訴追するために必要な情報を提供することが多いからだ。強姦という事件の性質上、証拠は特に重要である。さらに、証拠の一貫性や非一貫性が、強姦の告訴が大げさにされたものか、虚偽なのかを示唆する可能性がある。通常は強姦と関連する証拠の欠如によって虚偽告訴を区別できるのは、その種の証拠の存在が実際に強姦があったことを根拠付けるのと同様である。虚偽告訴を示唆すると思われる種類の証拠はつぎのとおりである。

- ・ 告訴人は、目隠しをされていたとも、薬物またはアルコールの影響下にあったとも、次々と移動させられたとも主張していないのに、犯罪がどこで起こったのか思い出せない。
- ・ 犯罪現場が話と一致しない。(例えば、地面が荒れていない、あるべきところに足跡がない、もみ合った後があるはずなのにない。)
- ・ 服の損傷と怪我とが一致しない。(例えば、切り傷や引っ掻き傷が服の裂け目や切れ目と一致しない。)
- ・ 告訴人が、強姦者からのものとされる殺人や強姦を予告した切り張りの脅迫状を見せる。
- ・ そのような脅迫状の文章または字が被害者らしき人のものと一致する。(例えば、筆跡鑑定や、文章の初めを字下げするとか、タイプライターの型とか、持っている紙とか、ついている指紋によってわかる。)
- ・ 犯罪を裏付けるような鑑識結果がない。

## 人格および生活スタイルの考慮

強姦の虚偽告訴においては、包括的で重要な告訴人の情報が入手できることが多い。一般的に  
いって、それらの情報は、被害者とされる人が多くの個人的な問題を抱えていて、その問題に対  
処する能力が深刻に不足していることを教えてくれる。

- ・ 時系列で言えば、その女性がプライベートな人間関係において問題を抱えていたことを示す  
ような大きな出来事が1つかそれ以上起こった後に、「強姦」が起きる。
- ・ 告訴人には、精神的または感情的な問題を持っていたという経歴（特に、ヒステリックある  
いはボーダーライン的な特徴を持つ自傷的行為）がある。
- ・ 同様の状況で過去に暴行または強姦されたという記録がある。
- ・ 似たような犯罪が報道された後に通報された。（この場合、報道された情報との類似によって  
信頼性を付与するためのモデリングないし真似が示唆される。）
- ・ 告訴人には、劇的な病気またはケガのために、広範囲な治療を受けた経歴がある。
- ・ 友人や同僚が、告訴人の事件後の行為や活動が彼女の言っていることと一致しないと言う。
- ・ 被害を補強する証拠を求めると怒る。
- ・ 告訴人が取り調べ中、「安全な」話題や、同情を惹起するような話題に移そうとする。

虚偽告訴に対しどのように対処したらよいか

（以下、訳省略）